

「子供親善大使」オーストラリア・ウーロンゴン市訪問

今年も川崎市内在住の小学5・6年生を対象とした作文と絵画のコンクール「第21回 川崎ジュニア文化賞」が開催されました。大賞者は川崎市の姉妹都市のオーストラリア・ウーロンゴン市に平成24年8月20日(月)から25日(土)まで親善訪問旅行をしました。本紙では「子供親善大使」の現地での様子と作文部門の川崎国際交流協会会長賞作品をご紹介します。



作文・絵画の部ともに大賞受賞者4名(作文・絵画各2名)が、「子供親善大使」として川崎市の代表となり、オーストラリア・ウーロンゴン市表敬訪問や小学校の訪問をしました。子どもたちは積極的に交流を図り、立派に親善大使の役割を果たしました。さまざまな体験を通して、オーストラリアの豊かな自然や文化を学ぶことができ、子どもたちにとって大変有意義な親善訪問旅行になりました。この貴重な経験は、今後子どもたちにとってかけがえのないものになっていくでしょう。

川崎国際交流センターでは、12月1日から12月16日まで、全ての入賞作品の展示会を行っています。ぜひ、子どもたちの素晴らしい作品をご覧ください。

作文の部 テーマ「ぼくの夢 私の夢」

◎川崎国際交流協会会長賞
川崎市立宮崎小学校 6年 袴田 美咲さん

日本を世界に広める

私は、父の仕事の関係で2年間ドイツに住んでいたことがあります。ドイツの幼稚園を半年間と、現地の小学校を1年半休まずに通いました。

幼稚園の半年間はドイツ語が話せなくて、あまり友達ができなかったけれど、アルファベットでつづられた本を眺めたり、ドイツの幼稚園では、よく手遊びや歌を歌うので、真似をしたりしていました。初めは、つい日本語がでてしまい、なぜ自分には話せないのだろうか、と悲しい気持ちになりました。でもそういった環境の中で、ドイツ語を少しずつ覚えて、みんなの話や先生の話がだんだん理解できるようになり、成長したのだと思います。

あれから3年の月日が流れましたが、私は今でもドイツの友達とメールでやりとりをしています。お互いの学校のことや興味のあることなどを質問し合います。昨年の東日本大震災の時には、ドイツのテレビでも、日本の津波の映像などが数多く放送されたそうで、日本をとても心配していることなどをメールの中で教えてくれ、遠く離れていても心はつながっていると思いました。

このように、他の国の人々と接することによって、その国のよさと日本の国のよさ、そして言葉の大切さを知ることができました。だから私は、これからもいろいろな経験を積んで、他の国々と自分の国の理解を深めて、その両方のよさを1人でも多くの人に伝えることのできる人になりたいです。

(※作文の一部抜粋です)

20年間を通してつなぐ中学生の国際交流

川崎市の美術教師 ^{さかた まさのり}坂田全徳さんは、子どもたちの絵を通じドイツやオーストリアの学校と国際交流を続けています。現在勤務する市立塚越中学校では、美術部の生徒たちが、季節のカードや交流写真の交換をしたり、東日本大震災への励ましのメッセージなどをいただいたりと、お互いの絆を深めています。



交流のきっかけは、学生時代のドイツ遊学になります。同世代のヨーロッパの友人ができ、教師になってからは、美術作品を生かした交流を授業に位置づけました。当時ザルツブルク市長であったレットナー市長に交流の意思を手紙で伝えたところ、市長からは「民間交流が私の本意」という返事をいただき学校間交流が始まり、早20年の時を刻みました。その後リューベックの学校との交流も実現し、生徒達には、川崎市民として同世代の文化交流の発展を期待しています。
(川崎市立塚越中学校 坂田 全徳さん)



～生徒のみなさんから一言～

私は国際交流で日本と外国の違い等、たくさん勉強になりました。返事の写真で、みんなが喜んでいる様子が嬉しかったです。
鮫島 由圭さん(2年生)

季節のカード作りで、私は返事が待ち遠しく、今もその時の事が思い出されます。

松本 夕海さん(2年生)